

令和8年度 坂城町公民館事業スタート!

令和8年度の公民館事業がスタートしました。分館役員のみなさん、本館専門部のみなさんを紹介します。

本館専門部員のみなさん

専門部は、町公民館の事業をそれぞれ分担して企画立案し、公民館運営の要として活動します。

総務部

町公民館事業全体を検討し、推進します。

部長 柳沢 友紀 (月見)
副部長 池口 瑞樹 (中之条)
塚田 薫 (横町)
中澤 弘幸 (新町)

総務部

文化教養向上のため、文化事業を企画・運営します。

部長 山辺 浩志 (上平)
副部長 植木 正弘 (南日名)
西澤 務 (入横尾)
守屋 健作 (四ツ屋)

体育部

健康増進のため、体育事業を企画・運営します。

部長 春日 利徳 (日名沢)
副部長 宮澤 和宏 (御所沢)
伊藤 聡 (泉)
宮原 健史 (網掛)

広報部

公民館報を編集し、発行します。

部長 菊田 甫之 (新地)
副部長 近藤 滋 (上五明)
若林 治人 (立町)
酒井 博司 (苅屋原)

分館役員のみなさん

(敬称略)

分館	分館長	副分館長	文化部長	体育部長	広報部長
鼠宿	赤池 篤	片桐 公一	赤池 洋夫	上原 哲夫	齊藤 信二
新地	沢崎 茂実	細川 勝好	山本 朗	沢崎 修一	菊田 甫之
金井	塩入 郁夫	栗田 智之	岩橋 優	前澤 章宏	富山 英樹
入横尾	成沢 博文	神林 賢一	西澤 務	滝沢 利憲	浅井 隆志
町横尾	中村 宏幸	川島 善幸	関 和弘	池田 明生	竹内 慎
泉	佐々木靖雄	中村 寿雄	中村 寿雄	伊藤 聡	吉原 好文
中之条	池口 瑞樹	柳澤 憲志 高橋 正行	村西 陽子	橋本 昇	石井 賢治
四ツ屋	岸田 幸一	山田 徳夫	守屋 健作	林 隆行	竹鼻 裕司
戌久保	永井 隆博	竹内 豊	-	手塚 朋大	辰野 淳子
御所沢	小宮山俊夫	柳澤 一男	塩野入浩子	宮澤 和宏	林 美子
田町	宮下 啓司	滝沢 幸男	宮下 琴美	今井 幹矩	中島 悠
横町	塚田 薫	宮下 秀陣 宮原 司	宮崎 義也	池田 裕宣	宮下 秀陣
込山	常泉 光洋	小日向恒穂 片桐 拓磨	吉沢 雅弘	北村 浩一	岩浅 和仁
立町	高山 秀雄	久 聡紀 宮入 陽	立野 慧子	兒玉 芳明	若林 治人
旭ヶ丘	青木 建治	長谷川敏行	森垣 正代	長谷川敏行	井上 敬子
南日名	海野 幸治	金子 保典 海野 政義	植木 正弘	小宮山貴久	植木 正弘
北日名	西澤 喜幸	中沢 利光 中沢 啓吾	園原 哲也	関 哲也	西澤 英司
日名沢	佐藤 修一	丸山 岳志	萩原 研斗	春日 利徳	萩原 康子
大宮	小宮山正憲	田原 茂樹	吉崎 博明	布施 五郎	池田 文夫
新町	中澤 弘幸	池田 浩希	清水 浩樹	古谷 真弓	清水 浩樹
坂端	高橋 昇	竹内 博子	高橋 祐次	高橋 貴	大久保美紀
苅屋原	千野 博	小出 彰久	岸部美智代	西村 正国	酒井 博司
網掛	宮崎 昭二	金子 司	朝倉三智雄	宮原 健史	浅野井 靖
上五明	師田 秀喜	滝沢 元紀 滝沢 敏之	藤井 博美	石間 笑	近藤 滋
上平	村田 牧男	柳澤 定則	山辺 浩志	竹内 直子	朝倉 一樹
小網	赤池 邦浩	玉井 秀一	山崎 了	西澤 茂盛	吾妻 敏光
月見	柳沢 友紀	高島 晴夫	瀬在 恵一	神田 徳幸	島田 俊一

第30回更埴地区短詩型文学祭表彰式

更埴地区公民館運営協議会(千曲市と坂城町で構成)主催の、第30回更埴地区短詩型文学祭表彰式が開催され、短歌の部、俳句の部、川柳の部、現代詩の部の各賞が決定し、表彰式が行われました。投稿数合計2,847作品のうち、坂城町の方の更埴地区短詩型文学祭大賞、更埴公民館運営協議会長賞、奨励賞、佳作、入選の受賞者を紹介します。

(敬称略)



一般の部

「短歌の部」

※更埴公民館運営協議会長賞
小宮山 洋子

◆佳作 横田 徳子
水出 秀子

◆入選 塩野入はる江
細谷 智恵子

「川柳の部」

◆佳作 春日 とよ子

◆入選 小宮山 洋子

「現代詩の部」

※更埴地区短詩型文学祭大賞
上原 みち子

◆佳作 石関 みち子

◆入選 小宮山 洋子
松澤 瑞枝

※更埴公民館運営協議会長賞
石関 みち子

中・高校生の部

「俳句の部」

※奨励賞
坂城高3年 小山 佳将

◆佳作 坂城高3年 宮坂 航旗

「現代詩の部」

◆佳作 坂城中2年 中村 叶音

小学生の部

「俳句の部」

※奨励賞
南条小4年 塚田 帆乃夏

◆佳作 坂城小5年 大谷 琉太朗

◆入選 村上小3年 井澤 廉

「川柳の部」

◆佳作 坂城小6年 西澤 諒
村上小6年 尾崎 ひまり

500メートルク

標高差のある地域に暮らして

鳥居 歩

私は、転勤族だったため栃木県の平野部と愛知県の半島で生活をしてきたことがあります。

休日には外で遊ぶことが多い我が家は、栃木県の時は近くの川で過ごすことが多く、愛知県の半島の際はほぼ標高差がなかったため海で過ごすことが多い生活でしたが、山が身近にある坂城で育った私には、見える景色に何か少し物足りなさを感じていました。

これら両県には標高が高い地域もあります。群馬県との県境だった栃木県の平野部から標高が高い日光や那須地域までは高速を利用して2時間程度、愛知の時は半島であるがゆえに、近場で標高差を求めるのは、

難しい環境でした。長野に帰省した際に、菅平や鹿沢、霧ヶ峰など標高が1,000メートル以上の所に行くと、当然ながら標高差を体感でき、また平野部と比較して気温も湿度も低いため、特に夏場は快適に過ごせました。

長野県出身の私にとって、この「標高差」は、リラックスする上でもとても大切な要素の1つだということ、何気なく見えている山々は当たり前ではなく、季節の変化を感じ取れることも含めて、ありがたい存在であることに気づきました。

これからも地元の自然に触れながら、この環境を大切に、子供たちに引き継いでいこうと思います。

―選者―
短歌の部 松林のり子 日語百合子 米澤 光人
俳句の部 青木く美子 大井さち子 本山 流水
川柳の部 近藤 魁風 青山 鉄夫 小宮山正雄
現代詩の部 柳澤 澄 平野 光子 (敬称略)

